

## 東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

### テーマ「下関と大陸」

#### 第11話 近世下関の発展と 伊崎新地の開発

小川 國治 (文化文明史研究室)

かつて、下関には、イギリス領事館の近くにジャーディン＝マセソン商会の支社があった。19世紀に世界で最大の商社であった同商会支社の存在は、下関の経済的な重要性を象徴するものと言えよう。下関（赤間関）は、古来、九州への「渡海口」として重要な役割を果たしたが、他方、「海の道」の結節地として発展したも広く知られている。

本講座では、Ⅰ長州藩と巨大商社——ジャーディン＝マセソン商会——、Ⅱ伊崎新地の開発——長州藩宝暦改革と流通政策——、Ⅲ伊崎新地と越荷方——米穀市場の創設——、Ⅳ幕末・維新期の下関——開港と国際化——など四つの観点から、近世中期以降、下関に繁栄をもたらした「伊崎新地の開発」を基に、長州藩の撫育方・越荷方との関係やジャーディン＝マセソン商会の支社が存在した理由なども明らかにした。

Ⅰでは、長州藩士5人のイギリス留学や長州藩と薩摩藩の経済的・政治的結び付きについて、ジャーディン＝マセソン商会とイギリス商人トマス・ブレイク・グラバー（同商会のエージェント）が大きな役割を果たしていたことを指摘した。Ⅱでは、長州藩宝暦改革の重要政策として、急速に発展していた海運への積極的な乗り込みをはかるため、新設の撫育方による港町の開発が進められたが、その最重要拠点とし

て伊崎新地が位置づけられていたことを明らかにした。Ⅲでは、伊崎新地の開発の目的が海運による商品流通の掌握であるとともに、米穀市場の創設でもあったこと示し、貸銀業と倉庫業を営む越荷方の実態を具体的に述べた。Ⅳでは、従来、あまり注目されていなかった石炭（長州炭）の開発を取り上げ、石炭が長州藩に大きな利益をもたらし、薩長交易でも重要な位置を占めていたこと、伊崎新地がその拠点になっていたこと、その延長線上に下関商社構想が存在したことを明らかにした。

以上のことから、「伊崎新地の開発」の歴史的な意義として、幕末・維新时期以降、下関が西日本市場と東アジア市場の結節点として発展する基盤を形成したことを強調した。

(平成15年7月5日開催)

#### 第12話 大陸との交流の窓口： 下関

黄 曉 芬 (文化文明史研究室)

2千年余もの昔から、海をへだてた中国大陸や朝鮮半島との交流をもつ日本。稲作農耕や豊かな暮らしに適した石製・金属製道具や信仰、生活習慣が日本列島の各地に伝えられた。

下関は山陽・山陰・北部九州を結ぶ要衝の地にあり、また大陸にも最も近い。そのため、早くも内外文化交流の窓口としての歴史的役割を果たしてきた。こうした由緒ある下関の歴史を土井ヶ浜遺跡から発見された渡来人の人骨、綾羅木郷遺跡、古墳から出土した大陸的要素をもつ遺物の数々、さらに朝鮮通信使の足跡を辿りながら考えてみた。主な内容は以下の通りである。